

[海外研究・教育活動]

途上国における障害のある人たちの主流への取込み

—フィリピンとバングラデシュへの研修報告—

新潟医療福祉大学 医療技術学部 理学療法学科 古西 勇

平成19年度、新潟医療福祉大学・短期留学制度の助成を受けて、途上国におけるリハビリテーションの現状について学ぶため、全6週間の日程でフィリピンとバングラデシュを訪問しました。

フィリピンの訪問先は中央部のビサヤ地方と南部のミンダナオ島、マニラ首都圏近郊でした。ビサヤ地方では島を巡回するリハビリテーション活動に1週間、ミンダナオ島では地域ぐるみのリハビリテーションの見学に4日間、Handicap International Philippines (HI-P) というNGO(非政府組織)の活動を通して学ばせてもらいました。HI-Pは、市の社会福祉課や国立障害者職業訓練所、村のボランティアなどとの連携を通して活動していました。首都圏近郊では、障害のある人たちが中心となって運営する障害者の自立支援施設を見学しました。

バングラデシュでは首都ダッカより西方のサバー郡にあるCenter for Disabilities in Development(CDD)を訪れ、リハビリテーション・ワーカーの研修コース(写真)を見学し、CDDのパートナーNGOが北部地方で行っている障害児の在宅訪問活動に同行させてもらいました。

途上国から先進工業国への医療専門職の移住は、様々な理由(自国で働く機会がない、海外で需要があるなど)によりますます加速している現象です。途上国の医療や社会福祉の問題は日本を含めた世界の問題ともつながっていることを理解する必要性を感じました。そのようなつながりを肯定的にとらえ、日本のリハビリテーション専門職を養成する大学として将来的には、途上国における学部学生のインターン実習や途上国からの留学生の受入れなどが課題であると考えます。

開発が進む途上国では、障害のある人たちが開発の主流から取り残されないよう、彼らの権利を擁護することが急務です。そのような社会的な側面も含め、さらに多くのことを学生とともに学べる機会を持ちたいと考えます。

